

「中国文化大革命 50 年と今日」写真展を開催

中国の文化大革命（1966～76年）から50年を迎えました。この激動の時期、本誌・アジア時報の写真を担当している日本写真家協会、荒牧万佐行氏が中国に入り、文革で嵐が吹く北京などの様子を撮影しました。当時、荒牧氏の写真は大きな反響を呼び、毎日新聞だけでなく米ライフ誌にも掲載されました。その荒牧氏の「中国文化大革命50年と今日—荒牧万佐行写真展」（後援・毎日新聞社）が9月16日から東京都内3カ所で開催されます。是非、お出かけください。

荒牧氏が文化大革命の取材に成功した経緯や当時の様子について寄稿していただきました。あわせて、写真展に出展される作品の中から10点を掲載します。荒牧氏は最近、中国に行き、当時撮影した同じ場所の「現在」を撮影し、50年の時空を超える見事なコントラストを描き出しました。（編集部）

写真展の詳細は次の通り

- ①9月16日～同22日
東京銀座5 フレームマンギンザサロン
（東京都中央区銀座5-1 銀座ファイブ2F
TEL：03-3574-1036）
- ②10月3日～同15日
プレスセンター 日本記者クラブ9Fラウンジ
（東京都千代田区内幸町2-2-1
TEL：03-3503-2721）
- ③10月25日～同28日
毎日新聞社1F アートサロン毎日
（東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL：03-3212-0321〈内線8658〉）

中国文化大革命50年と私

荒牧 万佐行 氏
（日本写真家協会会員）
あらかまき まさゆき

騒然とした光景に衝撃

50年前、世界の目は文化大革命の嵐に包まれていた中国大陸に注がれていた。私は毎日新聞社中国特派員視察団の一員として1967年1月から2週間、故林健太郎氏（元東京大学教授）、故村松暎氏（元慶応大学教授）、故土井章氏（元経済評論家）と共に深洲、広州、北京、上海を訪れる機会を得た。

粉雪が舞う北京では、三角帽子をかぶされた実権派幹部が、首から罪状の看板を下げてトラックの荷台の先頭に乗せられ首根っこを押さえられていた。地方ではトラックの数が少ないのか、三角帽子をかぶせられ街中を歩かされていた光景も目撃した。その要人の周りを何人もの子供が一緒に取り囲み、チンドン屋でも見ているようだった。

夜具や生活必需品を背に、地方から出てきた紅衛兵の姿もあった。ドラや太鼓を打ち鳴らし、毛沢東国家主席の肖像を掲げて行進する人民解放軍の男女兵士。騒然とした光景を目撃し、強い衝撃を受けた。

壁新聞は中国全土に氾濫していた。空港のロビーや通路の紡績工場の入り口、作業場にもベタベタ張られていた。閉店した百貨店の二階にまで壁新聞は張られ、集まった群集がそれを読みながら大声で討論する光景が深夜まで続いていた。老人や子供にも分かる風刺漫画まで登場し、バス

やトラックにもスローガンが張られていた。朝、ホテルの窓から道路を見ると、路面に新しく書かれたばかりのスローガンが見えた。

紅衛兵が権力を奪取していた北京公安局が、軍の管理下に入った。地方から都心に向かう子供たちは国からお金を受け取り、夜具や鍋を背負って修学旅行気分旅を続けていた。

革命中も恋が生まれる

自由に歩き回って撮影することは出来なかった。中国側が用意したマイクロバスの車窓からの撮影が主だった。

上海では深夜、上海大酒店の前を行きかう群集や紅衛兵の姿が窓から見えた。オーバーコートの中に28センチのカメラを隠し持ち、鍵の開いていたホテルの厨房から外に出た。黄浦江の河口近くで仲良く語り合う二人の男女の姿があった。

「革命中も恋が生まれる！」。いい被写体だと思い、コートのあいだからシャッターを押した。その瞬間だった。公安が私の腕をつかんだ。「何をした！パスポートを見せろ！」。私を取り囲んだ20〜30人の群集からも「われわれの問題だ」「フィルムを出せ」と脅された。とっさの判断でカメラから取り出したフィルムとポケットの中にあつた新しいフィルムをすり替えて渡し、写真は無事だった。



①三角帽子をかぶせられた実権派幹部。すれ違った解放軍兵士からも歓声があがった(北京)

今年6月、二人連れが休んでいた同じ場所を訪れた。モダンな高層ビルが立ち並び、50年の歳月を思わずにはいられなかった。

文革の写真は毎日新聞、サンデー毎日、カメラ毎日、米ライフ誌に掲載され、一連の写真で1967年度の写真協会新人賞を受賞した。これを期に毎日新聞写真記者に採用され、恩師の元日大芸術学部教授、故渡辺義雄先生も大変喜んでくださった。

文化大革命

中国で1966年から毛沢東死去の76年まで続いた政治運動。毛沢東が「大躍進」運動に失敗した後、権力奪還を狙って提唱したとされる。「紅衛兵」と呼ばれる若者を中心とした大衆動員により、政治指導者や知識人にとどまらず、職場の幹部、教師が攻撃を受け、文化遺産が破壊された。中国共産党は81年、文革を全面否定する「歴史決議」を採択したが、今なお、党の汚点としてタブー視されている。



②三角帽子をかぶせられ、歩かされる「反動分子」。子供がついて回り、チンドン屋のようだった（上海郊外）



③革命の一日が暮れて、堤防で寄り添う恋人たち（上海）



④ 50 年前に撮影した二人連れが休んでいた同じ場所を訪れた。モダンな高層ビル群が林立している（上海＝現在）



⑤ 地方から出てきた紅衛兵。万里の長城を見学する彼らは修学旅行気分。笑顔で楽しそうだった（北京）



⑥ ホテルの窓から見た路上。大きな文字のスローガンが書かれていた（上海）



⑦ 白い布を羽織った子供を反動分子に見立てて遊ぶ子供たち（上海）



⑧風刺漫画も登場した壁新聞(上海)



⑨黄浦江河口の観光船上から美しい景色を楽しむ若い女性(上海=現在)



⑩天安門にある狛犬もむしろ巻きに（北京）



荒牧万佐行（あらまき・まさゆき）氏 1941年神奈川県生まれ。1967年毎日新聞社入社。東京本社写真部記者、同編集局編集委員などを歴任。現在はフリーの写真家。日本写真家協会会員、日本建築写真家協会会員。一連の文化大革命報道で1967年日本写真協会新人賞受賞。鎌倉の円覚寺を撮影し続け、写真展「心の寺 円覚寺」をこれまで7回開催。主な写真集に「円覚寺舍利殿」（毎日新聞社）、共著「新・山谷ブルース」（批評社）などがある。